

# 背景

思いを、言葉にする。  
言葉を、文字にする。  
文字を、フォントにする。  
フォントによって思いの伝わり方は変わる。  
フォントは、思いの数だけあっていい。

わたしたちは、生まれた時から文字に囲まれ無意識に接している。  
フォントは、もともと表現作品だったのだけれど、工業製品のなもので一部の専門職の領域扱いだった。  
でも、デジタル技術のおかげでフォントは、解放された。  
こんなフォントがあってもいいんじゃない。個人でも作ることができる。時代は変化している。  
いいフォント、よくないフォントなんて感性の違い。使いやすいか、使いにくいかも使う人の好み。  
読みやすいか、読みにくいかも。慣れると気にならなくなったりする。  
老若男女みんながフォントに目を向けると、表現はもっともっと自由になる。  
答えは、時代の流れが出してくれる。

時。

Mac (Macintosh) の登場によって、どちらかという工業製品の一部といった存在だった書体は、フォントといわれるようになり、個人のタイポグラファーでもつくりができる表現物になった。写植が全盛の頃、写研のタイポグラフィコンテストの2回目(1972年)の三席を受賞してから45年になる。レタリングからスタートしてグラフィックデザインを学び、AD、CDを務め独立したのが1990年。2年ほどしてMacを導入した。書体の数は少なく字形も古いものが中心でデザインの道具というには未熟だった。書体にうるさいADなどは、見向きもしなかった。しかし、図形を描くアプリケーションには驚異を覚えた。とくに曲線を描くのがラクだった。表現したいことが作業と同時にできる。製図道具や雲形定規、筆や墨もいらぬ。1ミリの間に10本の線を引く溝引きの技術も必要ない。デジタルによる産業革命を実感した。これを使えば漢字も制覇できると密かに感じた。私の作品をふりかえると、2000年発表の日本の明朝体「丸明朝体」、2005年発表の仮名12種がシャッフルできる組版「iroha gothic」、2009年発表の漢字の角丸2種がセットの「丸丸ゴシック」、2011年発表のディスプレイフォント「どんぐり」。そして、コラボレーションフォントは、2012年発表の筆文字の楷書「佑字」、2013年発表の手書き文字「山本庵」。2014年発表の最も細いフォント「芯」、と一通りのカテゴリーにあてはまるものを作ってきた。どちらかという他にはないフォントで、フォント表現の可能性をひきだす提案型だった。また、明朝体を作ってもいいかな、となんとなく思った。67歳の時だった。

器。

空気、水・・・言葉、・・・衣・食・住。空気、水は、地球が作り出したもの。それ以外は、人が生きていくうえで必要となり作り出したもの。人類は頭脳をもった思考する動物として地球に現れ、学習によって言葉が生まれ社会が形成された。現在、インターネットになり、言葉は瞬時に世界に拡散できる時代になった。言葉は、想像を超える力を発揮しはじめた。言葉は、フォントにおきかわる。人は生まれた時からフォントの中で生きている。空気や水と同じようなもので、フォントはどういうものか、などと意識していない。でも空気や水にもちがいはある。わずかな差がわかる。わずかな差を大切にしなければいけないという意識があるから安心して生活できている。言葉の思いはフォントという字の形におきかわる。ここにも「わずかな差の大切さ」が潜んでいる。このわずかな差から生まれる心地よさは、みんながフォントの心地よさって何だろう、という意識を持たなければわからない。その心地よさをみんなが共有できたとき文化として定着する。フォントは、伝統ある日本料理に通じている気がする。料理も器も表現の世界。味が濃すぎたり、器が目立ちすぎたり、盛り付けが雑だったり、ということと同じと思う。もちろん並べ方も含めての話になる。フォントも伝統文化の一つで伝統を重んじながら進化するもので、とくに明朝体という字形のフォントには、それが必要と思っている。今回、明朝体をつくるにあたって、フォントにあてはまる日本の伝統文化に通じるものって、何だろう、あてはまる言葉はなんだろう、となんとなく頭のみで意識していた。「優しさ」と「間」が胸に落ちた。この二つの言葉を器と考えた。

和。

漢字を分解すると、横棒、縦棒、点、ハネ、ハライなどのエレメントになり、図形に置き換わる。図形は、線で囲まれている。直線はシャープでモダン、曲線は柔らかいやさしさ。どちらにも美しさはある。ただ、直線の美しさには冷たさがある。とくに画面上では、直線のドットは一条乱れず並んでいるので白と黒のコントラストが強い。目が疲れる要素でもある。曲線のドットは、ズレて並ぶので乱れている。乱れることでコントラストが弱まり目にも優しくなる。目に優しいことは読みやすいことで美しさにもつながる。印刷された文字をルーペで見ると輪郭はギザギザになっている。印刷文字が読みやすく疲れにくい理由でもある。碓明朝体は、横棒、縦棒にも曲線を取り入れた。また、尖った部分をなくし、角ばったところもすくなくした。硬い、鋭い要素も曲線の優しさにおきかえた。「間」は、エレメントを並べる時にどう並べるかで表情が変わるバランス感覚。顔の表情はちょっとした動きで怖くもなり可愛くもなり美しくもなる。フォントも同じ考えで、白地に黒のエレメントをどう置くかの「間」の世界。文字の重心は上下左右とさまざまで、大きく見えたり、小さく見えたりもする。それらを整える。また、画数の多い漢字の潰れをなくしたり漢字の構成要素になる部首と部首との空間を調整して読みやすくする。といったことも「間」の世界。仮名は、すべて曲線構成なので「間」をどうするかになる。漢字と仲よくするために、ふところを広くして大きさを整え漢字のもつ四角感をあてはめてみた。几帳面さがでて漢字により近づいた。文章を追いかける目線のブレも軽減したと思っている。アルファベットの直線部分にも曲線を取り入れた。漢字のエレメントをあてはめ日本語との和を試みた。読みやすくするためにXハイトを高めにした。

壁。

日本で活字が一般の人たちの目に触れたのは、1870年(明治3年)に発行された新聞で一枚もので明朝体で組まれたものだった。文明を開化させた印刷技術の到来で明朝体は信頼できるものという扱いをされた。印刷会社はこぞって明朝体を出した。明朝体が世の中を席卷した。日本人にもっともなじんでいる読みやすい活字となった。明朝体には、そういう歴史がある。だから特別扱いされる。明朝体を広辞苑(第6版)で見ると、木版または活字の書体の一つ。縦線は太く、横線の細いもの。もと宋朝に起こり、明朝の時に日本に伝来した。現在、新聞・書籍・雑誌などの大部分がこの書体を使用している。と出ている。他の辞書では、横線について横線は細く三角の止めがついたもの。と書いてあるものもある。いいかえると明朝体についての意識はバラついている。日本語フォントは、ごく一部の人たちによって作られてきた。いまだに一般の人は、フォントを作ってる人がいるんだ、そういう仕事があるんだ、とビックリされる。フォントを作るとフォントの専門家になってしまう。長く作っている人は、専門家の専門家になる。専門家のちがいで、何。ということになる。フォントを作るとき、私はこう考えて作りました。その理由は、という答えがある。その答えは一般の人にも理解して納得してもらわなければならない。そうしないとメジャーになれない。表現も偏る。例えば、三角の止めがついている。永い書の歴史をもつ中国では明朝体は、楷書体が印刷用におきかわったものというあつかいで軽く見られている。三角にこだわるかどうかは判断のわかれ目になる。明朝体は中国からやってきた、その時点で止めは三角になっていた。私は、三角の止めは中国の表現と考えている。三角にこだわると日本人の独創性がでない。世界から見ると、日本はいつまでも中国の文字を使っていると思われる。今回の碓明朝体の止めも三角にはこだわらない考えでいた。しかし、定着して馴染んだものはそう簡単には変えられない。ということで、丸みをもたせた優しい三角にとどまった。

想。

日本人は、あるものをより繊細にしたり、また使いやすくしたりするのが得意な民族でそれをよしとしているところがある。フォントも表現するものだから独自性を問われる。中国の明朝体に仮名を加え日本語としてつかう。日本語も意味をもっている漢字がなければ機能しない。漢字が主役と思う。主役の漢字を日本らしくしたい。日本語は、奥が深く豊かである。日本文学はノーベル賞の常連でもある。そんな日本語にふさわしいフォントは明朝体だと思っている。ただ明朝体にもいろいろある。できれば日本語が美しく見える明朝体だといいなあ、と思う。それはどんな形だろう。例えば、こんな形はどうだろう、と思って作り続ける。答えは簡単には見つからない。美しさの価値観は、時代の流れの中で変化する。美しさは、永遠のテーマといわれる。フォントにもあてはまる。仮名は、日本人の感性から生まれた。女性の感性が色濃く潜んでいる。流れる曲線の繊細さ。これほど美しい文字はほかにはないと思っている。この仮名に似合う明朝体がきっとあると思っている。日本語は、おもに漢字、かなカナ、アルファベットを使う。かなり特殊な言語だと思う。異なる3つの言語を日本の感性でまとめ惚れ惚れするまでに仕上げることは、相当の感性と時間が必要となる。今世紀中に間に合うだろうか。アルファベットに凌駕されないだろうか、と大袈裟になったりもする。でも読者である一般の人たちの意識がフォントに向かえばもっと早く実現する、と思っている。かわいい、かっこいい、やさしい、おもしろい、つよい、こわい、といった表現も、昇華すると美しくなりアートの領域に入る。美しさは人を魅了する。日本語は豊かで美しい、世界を魅了している。フォントでも魅了したい。

齢。

昨年3月、行政から、あなたは後期高齢者ですよ、医療についてや介護についてや運転免許手続きなど、こうなりますよ、という知らせが届いた。古希（70歳）そうかあ～、きたかあ～。たしかに記憶力の衰えの進みは早い。足腰も弱くなっている。私たち戦後の団塊の世代といわれる人たちがこれから後期高齢者になっていくんだなあ。頭の隅でそんなことを思ったりしながら、四六時中、Macと向きあっている。夏は5時位、冬は6時位には目がさめる。洗面をして8時の朝食まで、と、食後、出勤までの一時間ほどMacに触れる。歩いて10分の事務所に行く。午前の仕事は、昼食までの2時間。昼食は自宅にお茶漬けを食べに帰る。胃に優しく負担にならない。座りっぱなしの仕事にはちょうどいい。午後の仕事は6時まで。晩酌しながらの夕食後、TVを見る。途中うたた寝をしている、と妻に言われる。そのせいか寝るのは12時ごろ。これが私の大雑把な平均的な日常の行動になる。事務所までの2往復40分歩くことが健康のための運動になっている。事務所には、メールのやりとり、フォント制作の技術的なことも片付けてくれる優秀なスタッフが1人いる。外泊で家を空けるときはMacをもっていき、空いた時間は作業する。一文字でもいいから作るようにしている。間を開けないことがヒケツ。塵も積もれば山となる、である。1日10字つくるとする。月に300字、年3600字。Adobe Japan1-3 Stdは、9354字。約3年必要になる。風邪をひいたり、体調が悪かったりすると間があく、リズムが崩れる。これは要注意、挫折につながる。作っている間はなるべく平日と同じパターンを心がける。曜日の感覚が薄れ今日は何曜日といつも聞くので、そのたびにまたですか、という顔をされている。碓明朝体は、こういう生活の中で3年ほどかかった。今回はライト。この後、レギュラー、ボールドが続く。体力との勝負になる。